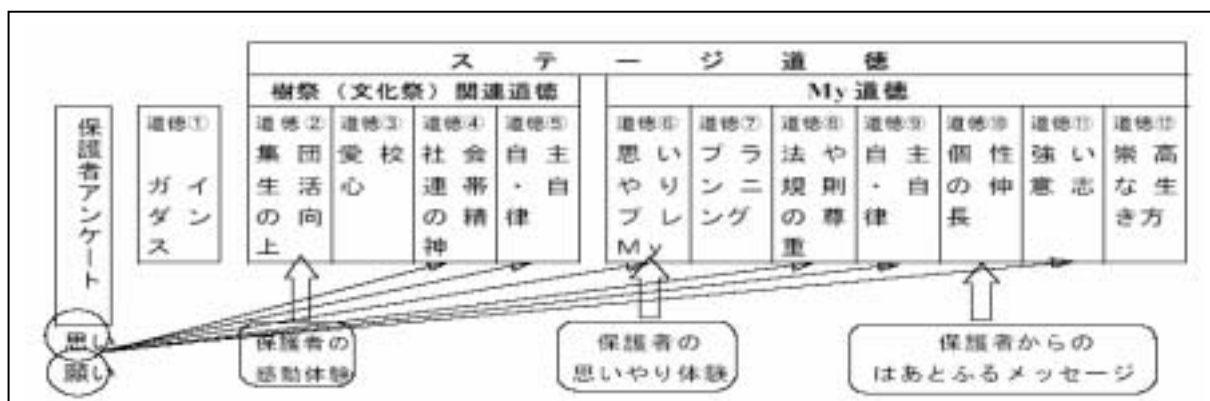




実践例 1 授業を変えるー教師主導から子どもが主役の道徳学習へ
 ー 子どもと共に創る“My道徳”の時間を取り入れた「ステージ道徳」の提案ー
 平成 14 年度 長期研修員 櫻井 雅明
 (平成 14 度 長期研修員研究報告書より一部抜粋)



(2) ステージ道徳

ステージ道徳とは、**子どもの学びのステージのねらいと密接な関係をもった内容項目を取り上げて指導する道徳の時間（複数価値で一つの単元を構成する単元型道徳）**である。

子どもの学校生活をもとに、1年間で8つの学習期（学びのステージ）に分ける。それぞれの学習期には、様々なねらいをおく。学校に活力が生まれるのは、学校全体が一つの方向を目指し、大きなうねりができたときである。例えば、学校全体がある行事を目指して一色に染まったとき、その活気は一人一人の生徒の行動によって支えられることになる。そして、その行動・行為を支えるのは一人一人の心であり、その心を育てるのが道徳教育である。

これまで行事との関連を図った指導はしてきた。しかし、道徳の時間が事前、事後と単発な関連で行われ、連続したものではなく、子どもの意識を行動・行為へ反映させていこうとすると、やや弱い所があった。それを、生徒の意識を連続させ、より密接なつながりをもたせて行動・行為まで意識させ、より効果的に指導しようとするのが、ステージ道徳の考え方である。

(3) My道徳

My道徳とは**子どもの思いや願い、問いをもとに子どもが主体となって教師と共に創る道徳の時間**のことである。

子ども自身が自分の生活の中から、最近気になっていること、疑問に思っていること、感動したことなどを取り上げ、道徳的価値との関連を考え、自分自身の言葉で問いとして提案していく生徒発、生徒主体の「提案型」の道徳である。3年生では、2学期のステージ5（自分を見つめ、自己を向上させるステージ）に位置づける。また、My道徳は発達段階と学習習慣の定着度を考慮し、1年生4時間、2年生6時間、3年生8時間を位置づける。

3年生のステージ5「My道徳」は2学期後半である。折しも、3年生のこの時期は、1学期の修学旅行、球技大会、最後の中体連夏季大会、2学期のメイン行事である文化祭（藤樹祭）と、行事を一通り終え、三者面談を間近に控え、自分自身を見つめ進路にまっしぐらに向かおうとしている時期である。その時期に真っ正面から自分自身と向き合い、自己を向上させるステージを設定することは、大変意義のあることだと考える。自分自身と対話することで、自分自身の内面的な成長が期待できるばかりでなく、それぞれの考えを交流し合うことで、これから進路の開拓に向かうクラスのみとまり感を向上させることができると考えた。

実践例2

自己の世界を広げようとする心を育てる道徳教育の推進

ー 小中の連携を国際理解に生かした総合単元的な道徳学習プログラムー

平成 14 年度 長期研修員 赤坂 文弘

(平成 14 度 長期研修員研究報告書より一部抜粋)

(1) 多様な価値観との関連を図る道徳学習

本研究では、多様な価値観との出会いを意図的に計画していく。また、子どもの意識につながりと深まりを持たせるため、道徳の時間と体験活動（国際交流体験や異校種間の異年齢体験）を一つの流れとしてとらえる総合単元的な道徳学習を考えていく。（図2）

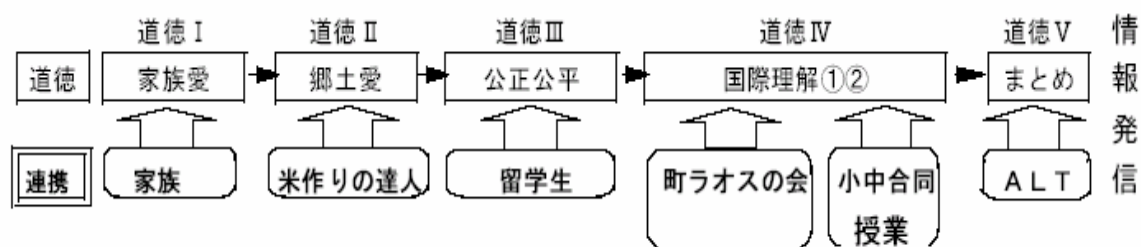


図2・内容項目間の関連を重視した総合単元的な道徳学習プログラムに、連携を組み入れた計画

(3) 重点価値とする「国際理解」

道徳学習における「国際理解」とは、①自己を素直に見つめ、身近な家族や郷土などのよさに気付き大切にしていきたいという思いをもつこと、②多様な価値観に出会うことによって、公平に接していくことの大切さを自覚すること、③異質なもののでも、違いを違いとして認め受け入れられることなど、世界の人たちと共に生きていこうとする人間性のことである（図1）。

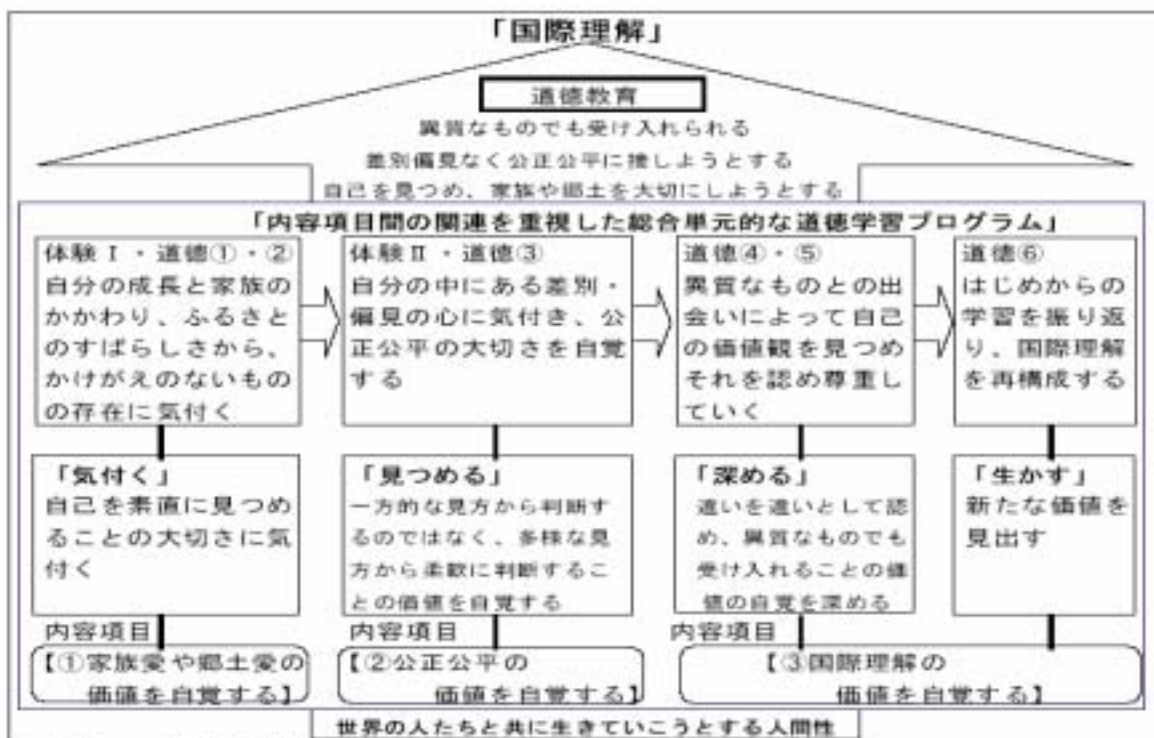


図1 「国際理解と道徳教育とのかかわり」

実践例3

互いに尊重し共に生きようとする態度 を育む道徳教育の工夫

— 「国際理解」の価値の重点化と地域に生きる
ゲスト・ティーチャーとのTTを通して —

平成 15 年度 長期研修員 田沼 正一

(平成 15 年度 長期研修員研究報告書より一部抜粋)

(1) 「主として集団と社会とのかかわりに関すること」についての価値項目の関連

「国際理解・人間愛」の心情を育むには、その価値に至るまでの基盤となる心情を育むことが重要であると考えます。すなわち、「集団と社会とのかかわりに関すること」についての価値は、関連し、連続しているものと見ることができると考えます。具体的には、まず自己と他の人との関係からお互いのよさを尊重すること(2-(5))を出発点として、集団や社会とかわることを通し、道徳的心情も「家族愛」(4-(6)) 「愛校心」(4-(7)) 「郷土愛」(4-(8)) 「愛国心」(4-(9)) 「国際理解・人類愛」(4-(10))と広がっていくものと考えます。

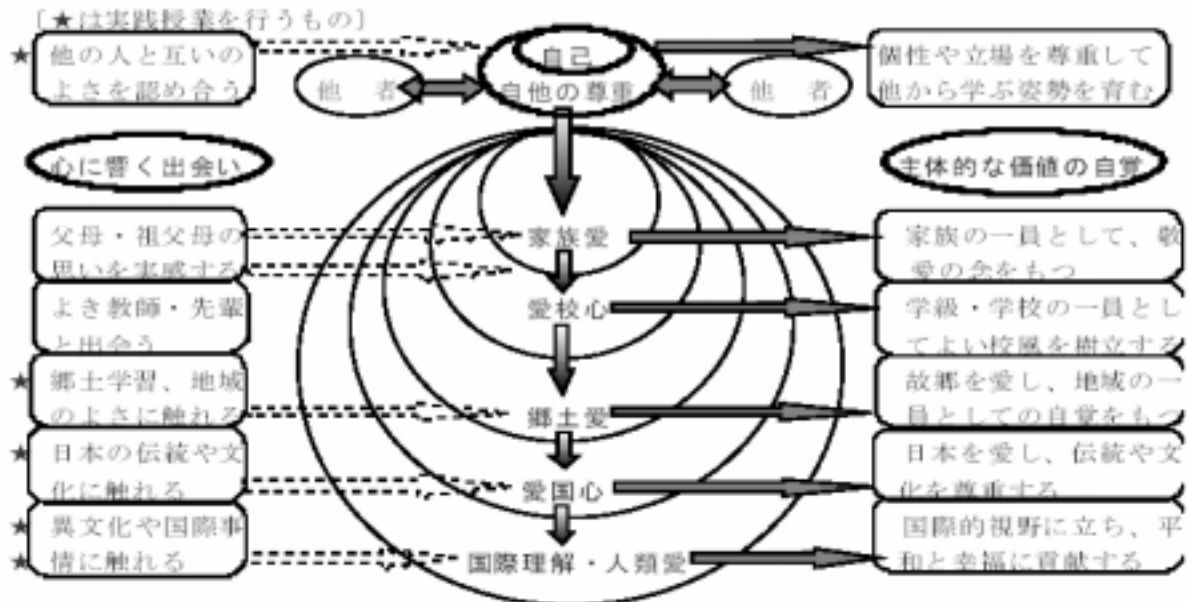


図1 価値の自覚につながるゲスト・ティーチャーとの心に響く出会い

それぞれの集団や社会の一員としての自覚をもち、互いに尊重し共に生きようとする態度を育むためには、その集団や社会に生きる人々と交流する体験をもつことが大切である。そのためには、道徳の授業に地域社会に生きる人々をゲスト・ティーチャーとして招聘し、子どもたちの心に響く出会いの場を設定して交流を重ねることで、それぞれの価値について主体的に自覚され、国際理解・人類愛の心情を育てることができると考えます。なお、実践授業に関わる価値の意識のつながりは、以下のように考える。

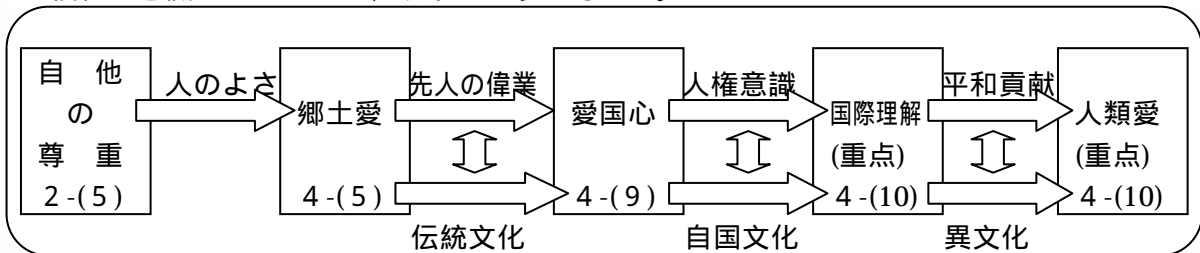


図2 価値関連における「国際理解」の意識のつながり

実践例 4

「いのち」の重みを自覚し、自分を輝かす生き方を追求しようとする心を育む道徳教育の工夫

— 他の関連価値とつなげて深める「いのちの授業」を通して —

平成 15 年度 長期研修員 久保 えり子

(平成 15 年度 長期研修員研究報告書より一部抜粋)

連携道徳で複眼的に学ぶ

複眼的に学ぶとは、図 9 に示したように子どもたちの実態を考慮し、関連する 7 つの価値項目を学年の発達段階に応じて連携させた複数時間扱いの学習である。複数時間での扱いは生徒の課題意識をつなげ、多方面から一つの価値を追求していくことで内面化につながると考えた。『生命尊重』の関連価値項目としては、「思いやり」(2-(2))、「自然への畏敬の念」(3-(1))、「節制」(1-(1))、「強い意志」(2-(1))、「家族愛」(4-(6))、「愛国心」(4-(9))、「人間愛」(3-(3)) を考えた。

各学年の実態と関連価値の関係

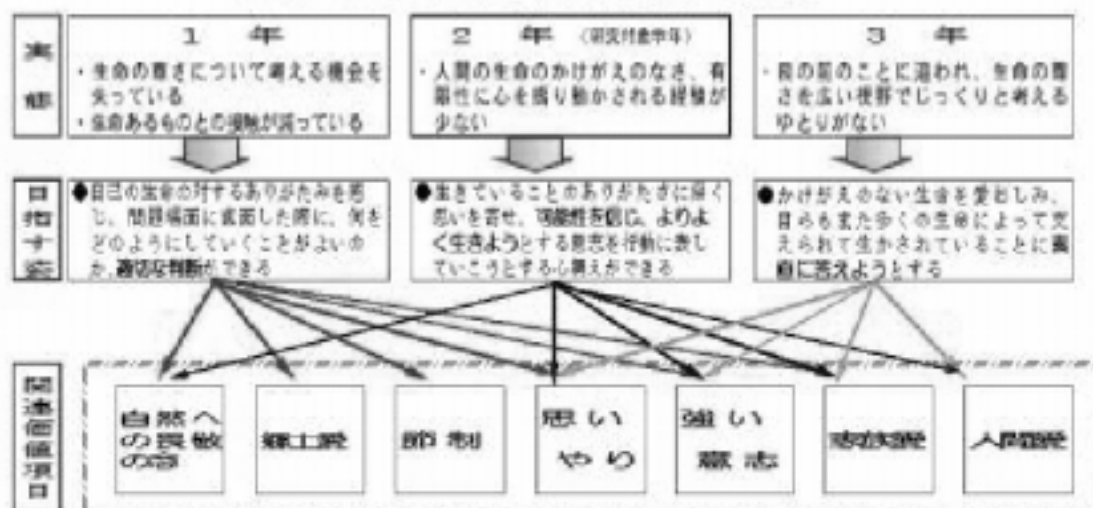


図 9 「いのち」の重みを自覚した生き方の追求に向けた重点指導計画

中学生の生活を見ると、ペットとして動物を飼っている生徒も少なく、小学校の低学年から塾やお稽古ごとに追われる生活の中で、自然と戯れる機会が少なくなっている。また、核家族化の中で死や生命の誕生を目の当たりにして「いのち」の素晴らしさや生きることの価値を見つめることもなくなっている。そういった実態を受け、大きな可能性を秘めた「いのち」を自分自身がもち、受け継いでいることの自覚を促し、人との関係を考えさせていきたいという思いから、7つの価値を連携させることとした。

「いのち」のもつ大切さを自分自身の観点からを見つめるために「思いやり」や「強い意志」を、他者とのよりよい関わりを広げていくために身近な「家族愛」を始めとして「郷土愛」、「人間愛」へと視野を広げて展開していくこと必要であると考えた。



上記実践例 1～4 の詳細については、群馬県総合教育センターのホームページから「教育研修員の研修内容」にアクセスして、ご覧ください。